

返り花

酒井秀郎

返り花

句集

酒井秀郎

句集 / 返り花 酒井秀郎

目次

あとがき	返り花	百日草	鳶尾草	冬牡丹	風船葛
	平成二十二年	平成二十一年	平成二十年	平成十九年	平成十八年
149	135	99	69	43	7

題 簽
カ ッ ト
装 幀

正 木 美 代 子
松 村 美 智 子
佐 藤 喜 孝

返り花

句集

酒井秀郎

風船葛

平成十八年



鳥雲に捨つるを老いの目途として

春寒と行きずりの人声呉れて

雑草と言へぬいとしさ延胡索

春暮るるあえかに鶯神楽咲く

春
愁
易
し
き
漢
字
忘
れ
を
り

海
棠
の
う
つ
ろ
ひ
は
やし
臥
し
を
れ
ば

東慶寺

春の暮土紋けだるき観世音

脳波とるさくら前線足踏みす

鋭き枝のけさふくらかや芽吹きたる

朝ごとの葉の仕分け梅雨籠

荒梅雨のつづく越より笹だんご

手ぬきして夏料理とぞふたりの餉

小田原 三句

角 櫓 あ る 濠 に し て 蓮 の 花

古稀庵

百 日 紅 明 治 元 勲 庵 跡

伝肇寺

白秋の住みし寺あり百合の花

通院に暮れしひと日や蚊遣焚く

忌につどふ風船葛のしづかな日

備中高梁

百日紅武家屋敷町きはやかに

鎌倉 四句

江の電の過ぎて風立つ百合の花

凌霄に四方の風あり海蔵寺

射干の花や風ある谷戸の径

カンナ燃ゆ七里ヶ浜に浪騒ぎ

狸小路ぬけて鬼灯市の灯へ

よく飛びし草矢の腕も老いにけり

諾
ひ
て
は
た
と
忘
れ
ぬ
蟬
の
殻

水^{みづ}
分^{まり}
の
神
お
は
し
ま
す
木
下
闇

人形焼をだきて仲見世傘雨の忌

キング・富士読みし幼な日信子の忌

吉屋信子

風鐸に青き空あり鑑真忌

花頭窓に日の移りをり花魁草

と
ろ
ろ
葵
ひ
と
も
と
咲
け
り
無
住
寺

送
り
来
し
干
瓢
ほ
ぐ
す
夜
の
秋

手より手に渡りて果てし花火かな

村ひとつ安房にまだあり卯波立つ

塔 見えて茂りゆたかに伝法院

老の艶見せて謡を夜の秋

すぐ寝落つ妻も八十路に夏深し

添水鳴る齡にかなふ平穩を

人
肌
の
酒
の
か
な
ひ
ぬ
菊
膾

魚
野
川
に
数
の
瀬
頭
稻
の
秋

妻の寝を押してたしかむ秋の朝

忍び手に送らるる友秋灯

松江
五句

秋澄むや水の松江の千鳥城

素朴さの美しき城薄紅葉

橋
づ
く
し
の
堀
川
め
ぐ
り
曼
珠
沙
華

風
と
ほ
る
外
濠
に
垂
れ
葛
の
花

ヘルン旧居

いまに咲きセツと八雲の萩・桔梗

友の僧絵筆を擱きし秋昼寝

新涼や播磨屋しのぶ大芝居

父の倍生きゐる八十路魂迎

小田原 二句

遠に見え相模に入りぬ青蜜柑

藁葺きの尊徳生家実南天

鎌倉 二句

数珠玉や青砥ゆかりの滑川

青砥藤綱

海蔵寺

枝あふれ花あふれをり磴の萩

白石 四句

秋時雨みちのくに酌む「男伊達」

甲冑堂閉ざされてあり柿の秋

城壁の野面積みなり菊花展

白石に名代の麴を秋深し

下町にのこる駄菓子屋獺祭忌

映りゐる紅葉神さぶ御射鹿池

供花にして華やぐ仏間実千両

卒寿なる女医手土産に冬すみれ

納め不動馴染みの店に立ち寄りて

ねんねこのやや児ふくらかローカル線

湯豆腐に老いの艶ある聞き巧者

年ごとに正月疎し春支度

わ
が
歩
み
俊
寛
に
似
て
年
暮
る
る

冬牡丹



平成十九年

ともかくも婚六十年の大旦

巢鴨高岩寺

人波に元気を貰ひ初地蔵

言ひ合うて日日安らかに七日粥

目瞑りて面影あまた冬牡丹

寒鴉昭和もいつかふた昔

家ごとになちがふ風除散居村

ち
よ
ぼ
く
れ
に
廓
の
色
香
初
芝
居

春
寒
し
歌
は
ぬ
母
の
唄
ふ
夢

雛
納
め
く
る
め
る
母
の
吉
野
紙

う
な
ぎ
屋
の
二
階
ゆ
れ
を
り
春
疾
風

そ
ら
み
み
に
地
震
あ
る
気
配
冬
旱

励
ま
す
も
叱
る
も
介
護
水
温
む

病む妻の腕の細し梅雨に入る

石道寺

たんぽぽに女の子の顔の観世音

清
明
や
戦
友
訪
ね
来
矍
鑠
と

防
人
と
散
り
に
し
友
ら
人
麻
呂
忌

嵯峨宝篋院

正行の首塚に散り桜しべ

楠木正成の長子

比良見ゆる観音道の風青し

風鐸に日ざし傾く
椎若葉

沖繩慰霊の日

この夏も「平和の礎^{いしじ}」
撫でて生き

明
けを待
つ仕
事さ
まざ
ま梅
雨漁
港

年
か
さの
海
女
よ
り潜
り梅
雨の
明

病
む
妻
に
献
立
難
し
朝
曇

打
水
や
戦
禍
の
が
れ
し
路
地
住
ひ

村
芝居の
閤魔
笑へり
花か
ぼち
や

梅
雨寒
の皿
に余
れり
舌
鯨

古物商ねばりて使ふ扇子かな

秋隣旅の日ごとに湯葉料理

妙法のおくれず灯り京の闇

浄土まで渡る船形灯さるる

秋涼し伝ひ歩きの妻の音

奥の院に灯火ひとつ雁渡し

虫の音を聞き分け妻の饒舌に

九体寺

弥陀の顔水面に映し秋の燭

癒えし妻厨に立てり秋の朝

給食を知らざるわれら生身魂

そぞろ寒ひと世長しと思ひをり

従姉妹みな遠きに老いぬ柿紅葉

秋
刀
魚
食
み
語
り
し
友
ら
黄
泉
国

存
へ
て
の
こ
る
は
何
ぞ
後
の
月

決然と野良猫でそろ冬来る

よく眠る八十路のふたり実千両

兵
舎
な
ほ
残
れ
る
鹿
屋
冬
鷗

若
き
友
十
勝
に
逝
き
し
柳
葉
魚
焼
く

万世橋に広瀬像ありき雪催

花八ツ手母の夜咄ひとつきり

鳶尾草

平成二十年



坂田藤十郎丈

初芝居艶冶あふるる大看板

松過ぎて長きふたりに戻りぬる

花八ツ手余命のけふをたひらかに

春立つや風に潮の香勝鬨橋

雨
畑

寒木瓜や継ぐにとぼしき硯職

「関の扉」を觀て木挽町雪明り

干海苔のつぶやく声す漁師町

床とこの下春めく波や伊根の宿

風強き宇良の社の木の芽かな

京都府伊根町にある浦島太郎を祀る社

川風に出湯の香あり春の宵

宝
城
坊

いとほしむ
鉋彫薬師
花の寺

妻の試歩庭の木の芽に声かけて

口遊ぶ持ち唄ひとつ春の野に

よき人の跡地の広し諸葛菜

塩煮してひとり餉をとる養花天

曲水の跡若草の毛越寺

虎杖に黯き空あり竜飛崎

鳶^い尾^ち草^はや古屋にふたり障りなく

は
か
な
げ
な
若
者
ふ
え
ぬ
薄
氷

観
音
へ
千
の
鈴
た
れ
花
あ
し
び

五箇山

筑子^{こきりこ}を打つ音聞こゆ青田風

小田原最乗寺

鉄下駄の名代の寺の実梅かな

名
を
残
す
高
井
戸
宿
の
桐
の
花

眼
福
に
真
帆
片
帆
あ
り
夏
座
敷

干瓢ほす風の隙間に猫の墓

薫風に抱卵の鳩声もらす

築五十年婚六十年の夕端居

汗ばみて置き薬屋の口八丁

夕
端
居
恙
の
証
爪
に
出
て

蚊
帳
く
ぐ
る
度
に
叱
り
し
母
遠
し

山一つ地震に失せたり梅雨じめる

糶終へし漁港の長き夏の昼

千
一
体
の
千
手
を
ろ
が
み
秋
涼
し

遠
き
日
の
自
裁
の
友
よ
盆
の
月

海野宿

梶 ある宿場一筋鳥渡る

波がしら鱸に光れり鯨日和

郡上八幡 二句

「宗祇水」の澄めるを掬す旅の朝

吉田川

飛び込みし男の子らを見ず秋の川

呼び合うて老いのふたりの十三夜

詩集 売る人ゐる 巷秋灯

日光

風 奔 る 戦 場 ケ 原 梅 も ど き

浜 菊 や 海 風 さ や ぐ み ち の く に

肌
寒
し
蒟
蒻
畑
の
嵐
の
日

瑞泉寺

眉
太
き
夢
窓
頂
相
菊
日
和

桜紅葉
勿来関
址へ一
丁場

干瓢を塩
でもみ
をり今
朝の冬

捨てられしやうに蒟蒻玉干され

出雲崎

良寛の海に風荒ぶ冬鷗

何事もなきが幸せ大根炊く

山茶花のしづかなひと日あることを

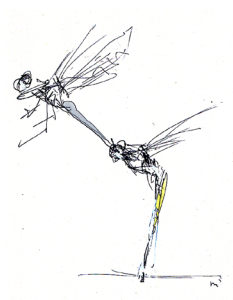
藤
棚
の
あ
は
ひ
に
流
れ
冬
の
雲

カ
ロ
ツ
サ
も
ヘ
ツ
セ
も
遠
し
冬
薔
薇

せはしくてさて変らざる年の暮

百日草

平成二十一年



出世には遠きひと世を初風呂に

初鏡母似の顔の米寿たり

初芝居 四句

析の直り競ふ声ごゑ初芝居

祝 成田屋復活

荒事の猛きを愛づる初芝居

祝
成駒屋一門

三
世
代
こ
ぞ
る
め
で
た
さ
初
芝
居

幕
間
に
繭
玉
の
許
葛
切
り
を

存
う
て
け
ふ
あ
る
が
ま
ま
冬
日
向

い
と
し
さ
の
人
ら
逝
き
た
り
冬
た
ん
ぽ
ぽ

大手門しつかと建てり冬木の芽

春浅しメニユー変らぬレストラン

入院余瀝（八ヶ月間） 十五句

救急車今はわが身に寒の街

洗はるる股間のわびし寒の明

待つことを学ぶ患者の春寒し

ナースみな同じに見ゆる水仙花

窓なき部屋ナースの告ぐる春一番

ビルの群衆にナース声高に

病癒ゆる目途はるかなり冬木の芽

春曙「おむつ交換」近づき来

恋
し
き
は
み
な
逝
き
し
人
春
の
雲

遠
き
日
の
き
び
し
き
鶺鴒
母
子
草

握手して見舞妻去ぬ春の鳶

面会了の春灯ひとつ点されて

夕虹や車椅子寄せ病舎窓

病院内の七夕に寄せて

癒ゆるほか望みなき日日星祭

試歩の目途百日草へ百歩ほど

花菖蒲三分や堀切との曇る

さくら回想 六句

尋ね来し磐城・岩代花の国

花あふれ人あふれをり花見山

名にし負ふ振もちずり摺石に散るさくら

定印に降りつむさくら露坐仏

丈
六
を
拝
む
里
山
遅
桜

薬
壺
な
き
瑠
璃
光
如
来
余
花
の
寺

別所
二句

小流れを渡り青葉の観世音

愛染に願ひをこむる青葉風

鮒
鮓
に
相
応
ふ
酒
選
り
近
江
な
り

青
葉
し
て
金
色
い
ま
に
光
堂

思ひ出 四句

子の食べて母のねぶりし蝦蛄の季

兵のころ佐世保花街飛^あ魚^ごばかり

十
銭
に
コ
ロ
ツ
ケ
六
つ
蠅
帳
に

七
銭
の
通
学
電
車
夏
帽
子

登米 三句

翁
来
し
登^と
米^め
郡
登^と
米^{よま}
夏
木
立

一
宿
の
翁
の
碑
あ
り
夏
柳

日盛りに明治洋風小学校

明治二十一年建
現在教育資料館

砂に寝て星の涼しき御前崎

手をつなぎ寝ねて夢あり夏の月

日盛りや貼り所なき千社札

ともに老いともに病みをり終戦忌

舩出て客を母船に秋の潮

栃
木

数
の
蔵
映
し
て
澄
め
り
巴うず
波ま
川

湖
北
三
句

渺
渺
と
鳩
の
湖
あ
り
秋
澄
め
る

菅
浦
に
湖
守
る
社
秋
の
風

桜
紅
葉
せ
り
大
崎
観
音
寺

ひとつ積みくづれしケルン松虫草

筑波嶺や小町の里の木守柿

退
院
せ
し
妻
の
饒
舌
秋
灯

黒
姫^{ろひ}
山^め
や
い
ま
も
ま
な
か
ひ
秋
桜

ヘルパーの里の味はひ茸飯

接ぎ穂なく石榴に似たり犀星忌

友
逝
き
て
さ
び
し
き
米
寿
枇
杷
の
花

手
締
し
て
羞
じ
ら
ふ
親
子
酉
の
市

老
い
ふ
た
り
伝
ひ
歩
き
す
冬
座
敷

そ
の
昔
サ
ツ
カ
ー
少
年
湯
婆
抱
く

空き家なりし隣家に火影十二月

煮こごりや婚六十年の縁あり

ヘルパーの卵とく音冬の家

返り花

平成二十二年



恙無き卒寿を
目指す老の春

向き合
うて明
け暮れ
同じ冬
籠

凜として寒の木瓜咲く風の庭

回覧板挨拶せぬ子の着ぶくれて

八代海

風をよみ冬風待てり帆立船

川原湯温泉

寒の闇めがけて湯かけ祭かな

安房の雨上総に晴れぬ水仙花

戸袋に昨夜の福豆春立てり

老老介護

春寒や妻を叱りて悔いたる日

のどけしや夫ゑがく妻八十路坂

万愚節かねのなる木に花咲きて

諸子焼く夕風通る湖の宿

遠き父母よりいとし冬至の湯

木洩れ日の寺の反り橋著莪の花

海鼠壁にそうて風立つ花葵

安産の曾孫待つふたり夕端居

長
き
名
の
薬
餌
数
数
朝
曇

梅
雨
明
や
半
跣
踏
み
下
げ
地
蔵
尊

返り花戻らぬ道に咲きぬたり

返り花いとしき人に会へる日を

楽
し
み
し
二
十
余
年
や
返
り
花

摺
筆

あ
と
が
き

この句集『返り花』は、『海紅豆』『宝鐸草』につづく句集ですが、これは第三句集とは言えぬ雑句集です。

昭和六十三年に「杉」に入会して以来二十二年、その間森澄雄先生をはじめ、多くの先輩、同僚からご指導を賜り、同人となり『宝鐸草』によって「杉賞」まで頂戴致しました。しかしそれらの栄誉に応える作品もなく経過しました。

平成十八年頃から妻の介護に当り、二十一年には私自身が八ヶ月間程入院して、退院後の現在でも歩行はままならず、外出もせずに送日しております。そして何事にも気力不十分となりました。

よって平成二十二年八月「杉」を退会し、同人を返上するという

措置をとりました。まことに残念であります。しかし俳句に親しんだ二十二年間の楽しい思い出はつきませんし、あれこれの生き方への指針を頂戴出来たことは、有難く深く感謝しております。

従つてこの句集は『宝鐸草』後の苦渋の月日の記録であり、皆様とのお別れの証として発表するものであります。長いご交誼を心から御礼申上げます。また長い交流によつて私を支えてくださった友人各位への最後のご挨拶でもあります。

この上梓に当り、三度も題簽を賜わった正木美代子氏、出版の労をとつて頂いた高橋鷹史氏、佐藤喜孝氏に心より御礼を申し上げます。

平成二十二年十二月

酒井秀郎

酒井秀郎句集

返り花

竹僊房



平成二十三年三月十五日印刷・発行

著者 酒井秀郎

東京都杉並区浜田山一—三〇—五

発行者 佐藤喜孝

印刷 藤美印刷

製本 コニタ製本所

発行所 竹僊房

東京都中野区中央二—五〇—三

電話 〇三—三三七—四六二三